(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2019-100018
(P2019-100018A)
(43)公開日　令和1年6月24日(2019.6.24)

(51)Int.Cl.		F I		テーマコード（参考）
E04B 9/30	(2006.01)	E04B	9/30	E

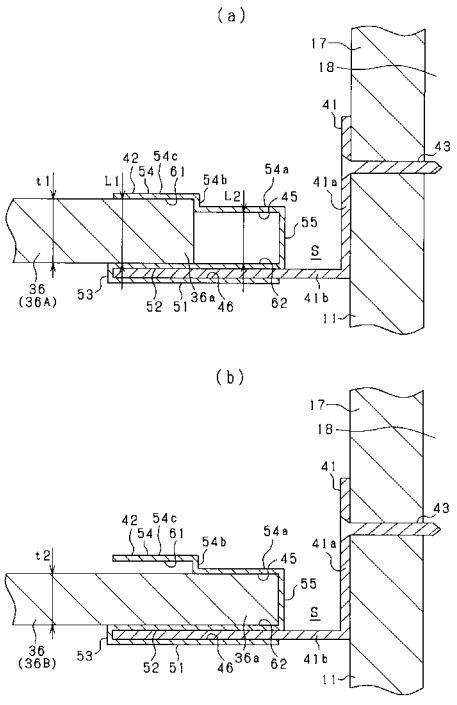
審査請求 未請求　請求項の数 4　ＯＬ　（全 11 頁）

(21)出願番号　特願2017-229371 (P2017-229371)
(22)出願日　平成29年11月29日 (2017.11.29)

(71)出願人　504093467
トヨタホーム株式会社
愛知県名古屋市東区泉一丁目２３番２２号
(74)代理人　100121821
弁理士　山田　強
(74)代理人　100161230
弁理士　加藤　雅博
(72)発明者　和田　幸子
愛知県名古屋市東区泉１丁目２３番２２号
トヨタホーム株式会社内

(54)【発明の名称】軒天板の見切構造

(57)【要約】
【課題】見切り材を厚みの異なる複数種類の軒天板に取付可能とすることで、見切り材の種類が増大するのを抑制することができる軒天板の見切構造を提供する。
【解決手段】建物において屋根部の軒部には軒天板３６が設けられている。軒天板３６の外壁側端部３６ａには、当該端部３６ａに沿って延びる見切り材４２が取り付けられている。見切り材４２は、軒先側に向けて開放された第１溝部４５を有し、その第１溝部４５に軒天板３６の外壁側端部３６ａを挿入させることで当該軒天板３６に取り付けられている。第１溝部４５は、溝部開放側の手前側部分６１と、その手前側部分６１よりも溝部奥側であってかつ当該手前側部分６１よりも溝幅が小さい奥側部分６２とを有している。
【選択図】　図３



【特許請求の範囲】
【請求項１】
建物の屋根において外壁よりも屋外側に張り出した軒部には前記外壁と軒先とに跨がるようにして軒天板が設けられ、
その軒天板の前記外壁側の端部に沿って延び、当該端部である外壁側端部を前記外壁側から覆う見切り材を備える軒天板の見切構造であって、
前記見切り材は、前記軒先側に向けて開放された溝部を有し、その溝部に前記外壁側端部を挿入させることで前記軒天板に取り付けられ、
前記溝部は、溝部開放側の第１部分と、その第１部分よりも溝部奥側であってかつ当該第１部分よりも溝幅が小さい第２部分とを有していることを特徴とする軒天板の見切構造。
【請求項２】
前記見切り材は、前記溝部を挟んで上下に対向する一対の対向板部を有し、
前記各対向板部のうちいずれか一方には、前記第２部分の前記溝幅を前記第１部分の前記溝幅よりも小さくさせる段差部が形成され、他方には前記段差部が形成されていないことを特徴とする請求項１に記載の軒天板の見切構造。
【請求項３】
前記各対向板部のうち、上側の対向板部に前記段差部が形成され、下側の対向板部には前記段差部が形成されていないことを特徴とする請求項２に記載の軒天板の見切構造。
【請求項４】
前記外壁には、前記軒天板の前記外壁側端部に沿って所定間隔で設けられるとともに、当該外壁側端部を支持する複数の支持部材が固定され、
前記各支持部材は、前記外壁の外面に固定された固定板部と、その固定板部の下端部から前記軒先側に延びる延出板部とを有するＬ字状をなしており、
前記見切り材は、前記溝部としての第１溝部に加え、その第１溝部の下方に前記外壁側に開放された第２溝部を有しており、その第２溝部に前記各支持部材の前記延出板部を挿入させることでそれら各支持部材に取り付けられていることを特徴とする請求項１乃至３のいずれか一項に記載の軒天板の見切構造。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、軒天板の見切構造に関する。
【背景技術】
【０００２】
住宅等の建物では、屋根において外壁から屋外側に張り出した軒部の底部に軒天板が設けられている場合がある。軒天板は、外壁と屋根の軒先とに跨がるようにして設けられ、その両端部がそれぞれ外壁側及び軒先側において支持されるようになっている。
【０００３】
軒天板は、その外壁側端部を外壁から離間させた状態で設けられる場合がある。この場合、軒天板の外壁側端部と外壁との間には所定の隙間が形成される。このため、その隙間を利用して軒天裏空間（軒天板の上方空間）の換気等を行うことが可能となる。
【０００４】
このように、軒天板が外壁から離間した状態で設けられる場合、軒天板の外壁側端部には見切り材が取り付けられることがある。見切り材は、軒天板の外壁側端部に沿って延びる長尺状とされ、外壁側から上記外壁側端部を覆うようにして設けられる。
【０００５】
見切り材は、例えば特許文献１に示されているように、軒先側に開放された溝部を有しており、その溝部に軒天板の外壁側端部を挿入させることで軒天板に取り付けられるようになっている。詳しくは、かかる見切り材では、溝部の溝幅（上下幅）が軒天板の厚みに対応して設定されており、溝部に軒天板の外壁側端部を挿入させると、溝部と外壁側端部

とが嵌合し、それにより見切り材が軒天板に取り付けられるようになっている。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００６】
【特許文献１】特開２０１３－１４７８１９号公報
【発明の概要】
【発明が解決しようとする課題】
【０００７】
ここで、軒天板には、厚みの異なる複数種類のものが存在する。このため、溝部を有する上述の見切り材を用いる場合、軒天板の厚みごとに溝部の溝幅を設定する必要が生じて、厚みの異なる軒天板ごとに見切り材を用意しなければならなくなってしまう。ただ、そうすると、見切り材の種類が増大し、見切り材について製造コストの増大や部材管理の煩雑さ等を招くおそれがある。
【０００８】
本発明は、上記事情に鑑みてなされたものであり、見切り材を厚みの異なる複数種類の軒天板に取付可能とすることで、見切り材の種類が増大するのを抑制することができる軒天板の見切構造を提供することを主たる目的とするものである。
【課題を解決するための手段】
【０００９】
上記課題を解決すべく、第１の発明の軒天板の見切構造は、建物の屋根において外壁よりも屋外側に張り出した軒部には前記外壁と軒先とに跨がるようにして軒天板が設けられ、その軒天板の前記外壁側の端部に沿って延び、当該端部である外壁側端部を前記外壁側から覆う見切り材を備える軒天板の見切構造であって、前記見切り材は、前記軒先側に向けて開放された溝部を有し、その溝部に前記外壁側端部を挿入させることで前記軒天板に取り付けられ、前記溝部は、溝部開放側の第１部分と、その第１部分よりも溝部奥側であってかつ当該第１部分よりも溝幅が小さい第２部分とを有していることを特徴とする。
【００１０】
本発明によれば、見切り材に軒先側に開放された溝部が形成されており、その溝部に軒天板の外壁側端部を挿入させることで、見切り材が当該軒天板に取り付けられるようになっている。そして、このような構成にあって、見切り材の溝部が、溝部開放側の第１部分と、その第１部分よりも溝部奥側であってかつ溝幅が第１部分よりも小さい第２部分とを有している。この場合、見切り材を、厚みの比較的大きい軒天板（例えば第１部分の溝幅と同じ大きさの厚みを有する軒天板）と、厚みの比較的小さい軒天板（例えば第２部分の溝幅と同じ大きさの厚みを有する軒天板）とにそれぞれ取り付けることが可能となる。すなわち、見切り材を厚みの大きい軒天板に取り付ける場合には、溝部の第１部分に軒天板の外壁側端部を挿入させることで、見切り材を当該軒天板に取り付けることが可能となる。また、見切り材を厚みの小さい軒天板に取り付ける場合には、溝部の第２部分に軒天板の外壁側端部を挿入させることで、見切り材を当該軒天板に取り付けることが可能となる。これにより、見切り材を厚みの異なる複数種類の軒天板に取付可能となり、その結果、見切り材の種類が増大するのを抑制することが可能となる。
【００１１】
第２の発明の軒天板の見切構造は、第１の発明において、前記見切り材は、前記溝部を挟んで上下に対向する一対の対向板部を有し、前記各対向板部のうちいずれか一方には、前記第２部分の前記溝幅を前記第１部分の前記溝幅よりも小さくさせる段差部が形成され、他方には前記段差部が形成されていないことを特徴とする。
【００１２】
本発明によれば、見切り材において溝部を挟んで対向する各対向板部のうちいずれか一方に、第２部分の溝幅を第１部分の溝幅よりも小さくさせる段差部が形成されている。これに対して、各対向板部のうちの他方には、かかる段差部が形成されていない。ここで、見切り材を軒天板の外壁側端部に取り付ける場合には、まず見切り材を外壁側に取り付け

、その後、その見切り材の溝部に軒天板の外壁側端部を挿入して取り付けることが考えられる。このようにして、厚みの小さい軒天板を溝部の第２部分に挿入して取り付ける場合、上記の構成では、段差部が形成されていない側の対向板部に軒天板の外壁側端部を沿わせながら挿入することができるため、かかる軒天板を段差部に引っ掛けることなく比較的容易に第２部分まで挿入することが可能となる。

【００１３】

第３の発明の軒天板の見切構造は、第２の発明において、前記各対向板部のうち、上側の対向板部に前記段差部が形成され、下側の対向板部には前記段差部が形成されていないことを特徴とする。

【００１４】

本発明によれば、各対向板部のうち、上側の対向板部に段差部が形成されている一方、下側の対向板部には段差部が形成されていない。この場合、厚みの小さい軒天板を溝部の第２部分に挿入する際、まず軒天板の外壁側端部を下側の対向板部の上に載せ、その状態で外壁側端部を第２部分まで挿入することが可能となる。これにより、かかる軒天板の溝部（第２部分）への挿入作業をより一層容易に行うことが可能となる。

【００１５】

第４の発明の軒天板の見切構造は、第１乃至第３のいずれかの発明において、前記外壁には、前記軒天板の前記外壁側端部に沿って所定間隔で設けられるとともに、当該外壁側端部を支持する複数の支持部材が固定され、前記各支持部材は、前記外壁の外面に固定された固定板部と、その固定板部の下端部から前記軒先側に延びる延出板部とを有するＬ字状をなしており、前記見切り材は、前記溝部としての第１溝部に加え、その第１溝部の下方に前記外壁側に開放された第２溝部を有しており、その第２溝部に前記各支持部材の前記延出板部を挿入させることでそれら各支持部材に取り付けられていることを特徴とする。

【００１６】

本発明によれば、外壁に、軒天板の外壁側端部を支持する複数の支持部材が固定されている。このような構成にあって、各支持部材は、固定板部と延出板部とを有してＬ字状に形成され、また、見切り材は、軒先側に開放された第２溝部を有している。そして、見切り材は、その第２溝部に各支持部材の延出板部を挿入させることで、それら各支持部材に取り付けられている。この場合、第２溝部は第１溝部の下方に位置しているため、第２溝部に挿入された各支持部材の延出板部により、第１溝部に挿入された軒天板の外壁側端部が下方から支持される状態となる。そのため、軒天板の外壁側端部を見切り材を介して各支持部材により安定した状態で支持することが可能となる。また、この場合、支持部材がＬ字状という簡単な形状で形成されているとともに、支持部材の延出板部が第２溝部に挿入され見切り材（詳しくは、第２溝部の下側部分）により覆われるため、支持部材により軒天板を支持するようにした構成にあって、コスト低減等の効果を得つつ、支持部材により外観が損なわれるのを抑制することができる。

【図面の簡単な説明】

【００１７】

【図１】建物における軒部周辺を示す縦断面図。

【図２】外壁に対する軒天板の支持構造を示す分解斜視図。

【図３】外壁に対する軒天板の支持構造を拡大して示す縦断面図。

【発明を実施するための形態】

【００１８】

以下、本発明を具体化した一実施形態を図面に基づいて説明する。本実施形態では、建物が、複数の建物ユニットが互いに組み合わされて構築されたユニット式建物となっている。図１は、その建物における軒部周辺を示す縦断面図である。

【００１９】

図１に示すように、住宅等の建物１０は、外壁１１と、外壁１１の上方に設けられた屋根部１２とを有している。外壁１１は、建物ユニットの躯体に取り付けられている。建物

ユニットは、四隅に立設された柱と、柱の上端部同士を連結する天井大梁と、柱の下端部同士を連結する床大梁とを有し、それら柱、天井大梁及び床大梁により形成された躯体は略直方体状をなしている。ここでは、天井大梁１５を図示しており、天井大梁１５には外壁１１の上端部が取り付けられている。

【００２０】

外壁１１は、外壁面を形成する外壁面材１７と、外壁面材１７の裏面（屋内側面）に取り付けられた下地フレーム１８とを有している。外壁面材１７は、例えば窯業系サイディングボードよりなる。下地フレーム１８は、上下に延びる縦フレーム材１８ａと、左右に延びる横フレーム材１８ｂとを有し、それら各フレーム材１８ａ，１８ｂが矩形枠状に連結されることで構成されている。下地フレーム１８は、その上側の横フレーム材１８ｂが天井大梁１５に固定され、その下側の横フレーム材１８ｂが床大梁（図示略）に固定されている。

【００２１】

屋根部１２は、寄棟屋根や切妻屋根などの傾斜屋根を構成するものであり、棟から軒先に向けて斜め下方に傾斜している。屋根部１２は、棟から軒先に向けて延びる垂木２１と、垂木２１の上に設けられた屋根下地材としての野地板２２と、野地板２２の上に設けられた屋根仕上材としての瓦２３とを有している。垂木２１は、その垂木２１を下方から支持する支持金物２４を挟んで天井大梁１５の上に載置されており、棟及び軒先が延びる方向に所定間隔で複数並べて配置されている。また、屋根部１２には、垂木２１と直交する方向に延びる母屋材２６が設けられている。

【００２２】

屋根部１２において垂木２１の軒先側端部には、垂木２１の軒先側端面等を隠す鼻隠し部３１が取り付けられている。鼻隠し部３１は、軒先に沿って延びる長尺状の鼻先木３２と、鼻隠し部３１の露出面を形成する鼻先化粧板３３とを有している。鼻先木３２は、複数の垂木２１に架け渡された状態で設けられ、それら各垂木２１にそれぞれ連結されている。鼻先化粧板３３は、鼻先木３２の外側面に対向する部分と、鼻先木３２の下面に対向する部分とを有しており、鼻先木３２の外側面に対向する部分が鼻先木３２に対して固定されている。また、鼻隠し部３１を挟んで垂木２１とは反対側には雨樋３４が設けられている。

【００２３】

屋根部１２において外壁１１よりも屋外側（側方）に張り出した部分は軒部３５とされている。軒部３５の底部には、軒天井を形成する軒天板３６が設けられている。軒天板３６は所定の耐火性能を有する板状の不燃材からなる。軒天板３６は、外壁１１の上部と屋根部１２の軒先（鼻隠し部３１）とに架け渡された状態で設けられ、軒先及び外壁１１に沿って延びている。軒天板３６は、その軒先側端部が鼻隠し部３１（軒先）によって支持されているとともに、その外壁側端部が支持金物４１等を介して外壁１１に支持されている。

【００２４】

鼻隠し部３１に対する軒天板３６の支持構成について説明すると、鼻隠し部３１の鼻先化粧板３３においては、鼻先木３２の下面に対向する部分が鼻先木３２から下方に離間しており、その隙間に軒天板３６の軒先側端部が入り込んでいる。軒天板３６の軒先側端部は鼻先木３２の下面に対してビス等により固定されており、軒天板３６の端面が鼻先木３２の外側面とともに鼻先化粧板３３により覆い隠されている。

【００２５】

続いて、外壁１１に対する軒天板３６の支持構成について図２及び図３に基づいて説明する。図２は、外壁１１に対する軒天板３６の支持構造を示す分解斜視図である。図３は、外壁１１に対する軒天板３６の支持構造を拡大して示す縦断面図である。

【００２６】

図２及び図３に示すように、外壁１１には、軒天板３６を支持する支持金物４１が取り付けられている。支持金物４１は、鋼板によりＬ字状に形成され、外壁面材１７の外面に

ビス４３により固定された固定板部４１ａと、その固定板部４１ａの下端部から軒先側（外壁１１とは反対側）に向けて延びる延出板部４１ｂとを有している。延出板部４１ｂは、その延出長さ（外壁１１の厚み方向の長さ）が固定板部４１ａの上下長さよりも長くされている。但し、延出板部４１ｂの延出長さは固定板部４１ａの上下長さと同じ長さであってもよい。なお、ビス４３は、固定板部４１ａと外壁面材１７とを貫通して下地フレーム１８に打ち込まれている。また、この場合、支持金物４１が支持部材に相当する。

【００２７】

支持金物４１は、外壁１１の壁幅方向に沿って（換言すると軒天板３６の外壁側端部３６ａに沿って）所定の間隔で複数配置されている。これら支持金物４１には、見切り材４２が取り付けられている。見切り材４２は、外壁１１の壁幅方向に延びる長尺状とされ、例えば合成樹脂材料により形成されている。見切り材４２は、各支持金物４１に跨がって設けられており、それら各支持金物４１に対してそれぞれ取り付けられている。なお、見切り材４２は、必ずしも合成樹脂材料により形成する必要はなく、金属材料（例えば鋼板）等、他の材料により形成してもよい。

【００２８】

見切り材４２は、軒天板３６の外壁側端部３６ａを外壁１１側から覆うための化粧材であり、軒天板３６の外壁側端部３６ａに取り付けられている。この場合、軒天板３６は、見切り材４２を介して各支持金物４１に取り付けられた状態にあり、ひいては見切り材４２及び各支持金物４１を介して外壁１１に取り付けられた状態にある。また、軒天板３６は、かかる取付状態において、その外壁側端部３６ａが外壁１１から離間している。

【００２９】

見切り材４２は、軒先側（反外壁１１側）に開放された第１溝部４５と、外壁１１側に開放された第２溝部４６とを有する。第１溝部４５には、軒先側から軒天板３６の外壁側端部３６ａが挿入されている。この挿入状態において、見切り材４２が外壁側端部３６ａに取り付けられている。

【００３０】

第２溝部４６には、各支持金物４１の延出板部４１ｂが外壁１１側から挿入されている。これら各支持金物４１の延出板部４１ｂは、第２溝部４６の最奥部まで挿入されている。この場合、かかる挿入状態において、見切り材４２が各支持金物４１の延出板部４１ｂに取り付けられている。また、かかる見切り材４２の取付状態において、見切り材４２は外壁１１から離間している。このため、外壁１１と見切り材４２との間には所定の隙間Ｓが形成されている。この隙間Ｓは、軒天板３６の上方空間（軒天裏空間）の換気を行うための通気用隙間等として用いられる。

【００３１】

第２溝部４６は第１溝部４５の下方に位置している。このため、第２溝部４６に挿入された各支持金物４１の延出板部４１ｂにより、第１溝部４５に挿入された軒天板３６の外壁側端部３６ａが下方から支持された状態になっている。つまり、この場合、軒天板３６の外壁側端部３６ａは、見切り材４２を介して各支持金物４１により支持された状態となっている。

【００３２】

続いて、見切り材４２の構成について詳しく説明する。

【００３３】

見切り材４２は、樹脂材料の押し出し成形によって長尺状でかつ板状に形成されている。この場合、見切り材４２は、その横断面（長手方向と直交する方向の断面）が長手方向の全域に亘って同じ形状とされている。見切り材４２は、第２溝部４６を形成する複数の板部５１～５３を有している。これら各板部５１～５３には、第２溝部４６を挟んで上下に対向する一対の対向板部５１，５２と、これら各対向板部５１，５２の軒先側の端部同士を上下に繋ぐ繋ぎ板部５３とが含まれている。各対向板部５１，５２の間の間隔、つまり、第２溝部４６の溝幅は支持金物４１（延出板部４１ｂ）の厚みと同じ大きさに設定されている。このため、第２溝部４６に支持金物４１の延出板部４１ｂが挿入された状態で

は、延出板部４１ｂが第２溝部４６と嵌合された状態となる。なお、第２溝部４６の溝幅は、支持金物４１の厚みと必ずしも同じである必要はなく、支持金物４１の厚みより若干小さくしてもよいし、若干大きくしてもよい。また、各対向板部５１，５２のうち、対向板部５１が下側、対向板部５２が上側に位置している。

【００３４】

本見切り材４２では、第１溝部４５に厚みの異なる複数種類（具体的には２種類）の軒天板３６を挿入可能となっており、それにより、見切り材４２をそれら各軒天板３６にそれぞれ取り付けることが可能となっている。そこで、以下においては、その点に関する構成について説明する。

【００３５】

見切り材４２は、上述した各板部５１～５３に加え、さらに、対向板部５２とともに第１溝部４５を形成する複数の板部５４，５５を有している。これら各板部５４，５５には、対向板部５２と第１溝部４５を挟んで上下に対向する対向板部５４と、各対向板部５２，５４の外壁１１側の端部同士を上下に繋ぐ繋ぎ板部５５とが含まれている。

【００３６】

第１溝部４５を形成する各板部５２，５４，５５のうち、対向板部５２は、外壁１１の厚み方向に水平に延びる水平板部となっており、第１溝部４５の下側に配置されている。この対向板部５２は、第１溝部４５と第２溝部４６との間に配置され、これら各溝部４５，４６を上下に仕切っている。

【００３７】

対向板部５４は、外壁１１の厚み方向に延びており、第１溝部４５の上側に配置されている。対向板部５４は、上記厚み方向の長さが対向板部５２の同方向の長さと同じとされている。なお、この場合、各対向板部５２，５４がそれぞれ特許請求の範囲に記載された「溝部を挟んで上下に対向する一対の対向板部」に相当する。また、対向板部５２が「下側の対向板部」に相当し、対向板部５４が「上側の対向板部」に相当する。

【００３８】

対向板部５４は、繋ぎ板部５５の上端部から軒先側に向けて延びる奥側板部５４ａと、その奥側板部５４ａの軒先側端部から上方に向けて短く延びる段差板部５４ｂと、その段差板部５４ｂの上端部から軒先側に向けて延びる手前側板部５４ｃとを有する。奥側板部５４ａと手前側板部５４ｃとはいずれも対向板部５２と平行な水平板部となっている。

【００３９】

第１溝部４５は、対向板部５２と手前側板部５４ｃとの間の手前側部分６１と、対向板部５２と奥側板部５４ａとの間の奥側部分６２とを有している。この場合、第１溝部４５の溝幅（各対向板部５２，５４の間の間隔）は、手前側部分６１よりも奥側部分６２の方が小さくなっている。つまり、手前側部分６１の溝幅Ｌ１（対向板部５２と手前側板部５４ｃとの間隔）よりも、奥側部分６２の溝幅Ｌ２（対向板部５２と奥側板部５４ａとの間隔）の方が小さくなっている（Ｌ１＞Ｌ２）。なお、この場合、手前側部分６１が「第１部分」に相当し、奥側部分６２が「第２部分」に相当する。

【００４０】

段差板部５４ｂは、外壁１１の厚み方向における対向板部５４の中央部に位置している。そのため、段差板部５４ｂを介して接続される手前側板部５４ｃ及び奥側板部５４ａは上記厚み方向の長さがいずれも同じとされている。また、この段差板部５４ｂが設けられていることで、奥側部分６２の溝幅Ｌ２が手前側部分６１の溝幅Ｌ１よりも小さくされている。詳しくは、この段差板部５４ｂが設けられていることで、手前側板部５４ｃと奥側板部５４ａとの間に寸法（Ｌ１－Ｌ２）の段差が生じている。なお、段差板部５４ｂが段差部に相当する。

【００４１】

次に、上記の見切り材４２が軒天板３６に取り付けられた取付状態の構成について説明する。以下では、見切り材４２が、厚みの大きい軒天板３６（以下、その符号にＡを付す）に取り付けられる場合と、厚みの小さい軒天板３６（以下、その符号にＢを付す）に取

り付けられる場合とについてそれぞれ説明する。なお、図３では、（ａ）に見切り材４２が厚みの大きい軒天板３６Ａに取り付けられた状態を示しており、（ｂ）に見切り材４２が厚みの小さい軒天板３６Ｂに取り付けられた状態を示している。また、ここでは、軒天板３６Ａの厚みｔ１が、見切り材４２の第１溝部４５の手前側部分６１の溝幅Ｌ１と同じ大きさに設定され（ｔ１＝Ｌ１）、軒天板３６Ｂの厚みｔ２が、第１溝部４５の奥側部分６２の溝幅Ｌ２と同じ大きさに設定されているものとする（ｔ２＝Ｌ２）。

【００４２】

なお、軒天板３６Ａの厚みｔ１は必ずしも手前側部分６１の溝幅Ｌ１と同じである必要はなく、手前側部分６１の溝幅Ｌ１よりも若干小さく又は若干大きく設定してもよい。また、同様に、軒天板３６Ｂの厚みｔ２についても、奥側部分６２の溝幅Ｌ２よりも若干小さく又は若干大きく設定してもよい。

【００４３】

まず、見切り材４２が厚みの大きい軒天板３６Ａに取り付けられる場合について説明する。図３（ａ）では、見切り材４２の第１溝部４５に、軒天板３６Ａの外壁側端部３６ａが挿入されている。この場合、軒天板３６Ａの外壁側端部３６ａは、第１溝部４５の手前側部分６１に挿入され、その挿入状態において見切り材４２の段差板部５４ｂに当接している。また、軒天板３６Ａの外壁側端部３６ａは、この挿入状態において手前側部分６１と嵌合している。これにより、見切り材４２が軒天板３６Ａの外壁側端部３６ａに対して取り付けられている。

【００４４】

続いて、見切り材４２が厚みの小さい軒天板３６Ｂに取り付けられる場合について説明する。図３（ｂ）では、見切り材４２の第１溝部４５に、軒天板３６Ｂの外壁側端部３６ａが挿入されている。この場合、軒天板３６Ｂの外壁側端部３６ａは、第１溝部４５の手前側部分６１を通じて奥側部分６２に挿入され、その挿入状態において繋ぎ板部５５に当接している。また、軒天板３６Ｂの外壁側端部３６ａは、この挿入状態において奥側部分６２と嵌合している。これにより、見切り材４２が軒天板３６Ｂの外壁側端部３６ａに対し取り付けられている。

【００４５】

ここで、上述した軒天板３６の見切り構造を構築する際の作業手順について簡単に説明する。

【００４６】

見切り構造を構築するに際しては、まず外壁１１に各支持金物４１をビス４３により固定する作業を行う。その後、それら各支持金物４１に見切り材４２を取り付ける作業を行う。この取付作業は、見切り材４２の第２溝部４６に各支持金物４１の延出板部４１ｂを挿入させることにより行う。

【００４７】

次に、軒天板３６を見切り材４２に取り付ける作業を行う。この取付作業は、軒天板３６の外壁側端部３６ａを見切り材４２の第１溝部４５に挿入することにより行う。この際、軒天板３６が厚みの大きい軒天板３６Ａである場合には、軒天板３６Ａを段差板部５４ｂに当接するまで挿入する。それに対し、軒天板３６が厚みの小さい軒天板３６Ｂである場合には、軒天板３６Ｂを繋ぎ板部５５に当接するまで挿入する。詳しくは、この際、まず軒天板３６Ｂの外壁側端部３６ａを対向板部５２の上に載置し、その載置状態で軒天板３６Ｂを第１溝部４５の奥側に向けて挿入していく。以上により、軒天板３６の見切り構造が構築される。なお、上記の作業の後、軒天板３６の軒先側端部を鼻先木３２の下面に取り付ける等することで、軒天板３６の設置作業が完了する。

【００４８】

以上、詳述した本実施形態の構成によれば、以下の優れた効果が得られる。

【００４９】

見切り材４２の第１溝部４５を、溝部開放側の手前側部分６１と、その手前側部分６１よりも奥側であってかつ手前側部分６１よりも溝幅の小さい奥側部分６２とを有する構成

とした。このため、上述したように、第１溝部４５の手前側部分６１に厚みの大きい軒天板３６Ａ（詳しくはその外壁側端部３６ａ）を挿入させることで、見切り材４２を当該軒天板３６Ａに取り付けることが可能となっている。また、第１溝部４５の奥側部分６２に厚みの小さい軒天板３６Ｂ（詳しくはその外壁側端部３６ａ）を挿入させることで、見切り材４２を当該軒天板３６Ｂに取り付けることが可能となっている。これにより、見切り材４２を厚みの異なる２種類の軒天板３６Ａ，３６Ｂに取り付けることが可能となり、その結果、見切り材の種類が増大するのを抑制することが可能となる。

【００５０】

見切り材４２において第１溝部４５を挟んで上下に対向する各対向板部５２，５４のうち、対向板部５４に、奥側部分６２の溝幅Ｌ２を手前側部分６１の溝幅Ｌ１よりも小さくさせる段差板部５４ｂを設ける一方、対向板部５２には、かかる段差板部を設けないようにした。これにより、厚みの小さい軒天板３６Ｂの外壁側端部３６ａを第１溝部４５の奥側部分６２に挿入する作業を行う際に、その外壁側端部３６ａを対向板部５２の上面に沿わせながら挿入することができる。そのため、その挿入に際し、外壁側端部３６ａを段差板部に引っ掛けることなく比較的容易に奥側部分６２まで挿入することが可能となる。

【００５１】

具体的には、各対向板部５２，５４のうち、上側の対向板部５４に段差板部５４ｂを設け、下側の対向板部５２には段差板部を設けないようにした。この場合、厚みの小さい軒天板３６Ｂを第１溝部４５の奥側部分６２に挿入する際、まず軒天板３６Ｂの外壁側端部３６ａを対向板部５２の上に載せ、その状態で外壁側端部３６ａを奥側部分６２まで挿入することが可能となる。これにより、軒天板３６Ｂの奥側部分６２への挿入作業をより一層容易に行うことが可能となる。

【００５２】

見切り材４２に、第１溝部４５に加え、その第１溝部４５の下方に外壁１１側に開放された第２溝部４６を設けた。そして、外壁１１に固定された各支持金物４１を固定板部４１ａと延出板部４１ｂとを有するＬ字状とし、これら各支持金物４１の延出板部４１ｂをそれぞれ第２溝部４６に挿入させた。そして、その挿入によって、見切り材４２を各支持金物４１に取り付ける構成とした。この場合、支持金物４１がＬ字状という簡単な形状で形成されているとともに、支持金物４１の延出板部４１ｂが見切り材４２の対向板部５１）により下方から覆われるため、支持金物４１により軒天板３６を支持するようにした構成にあって、コスト低減等の効果を得つつ、支持金物４１により外観が損なわれるのを抑制することができる。

【００５３】

本発明は上記実施形態に限らず、例えば次のように実施されてもよい。

【００５４】

・上記実施形態では、見切り材４２を厚みの異なる２種類の軒天板３６Ａ，３６Ｂに取付可能としたが、厚みの異なる３種類以上の軒天板３６に取付可能としてもよい。例えば、見切り材４２を厚みの異なる３種類の軒天板３６に取付可能とする場合、見切り材４２の第１溝部４５を、溝部開放側の第１部分と、その第１部分よりも溝部奥側の第２部分と、その第２部分よりも溝部奥側の第３部分とを有する構成とし、それら第１部分～第３部分の溝幅を第１部分の溝幅＞第２部分の溝幅＞第３部分の溝幅となるように形成すればよい。

【００５５】

・上記実施形態では、第１溝部４５を挟んで上下に対向する各対向板部５２，５４のうち、上側の対向板部５４に段差板部５４ｂを設け、下側の対向板部５２にかかる段差板部を設けないようにしたが、これを逆にしてもよい。つまり、下側の対向板部５２に段差板部を設け、上側の対向板部５４に段差板部を設けないようにしてもよい。具体的には、下側の対向板部５２を、繋ぎ板部５５の下端部から軒先側に延びる奥側板部と、その奥側板部の軒先側端部から下方に延びる段差板部と、その段差板部の下端部から軒先側に延びる手前側板部とを有する構成とする。また、上側の対向板部５４を、外壁１１の厚み方向に

水平に延びる水平板部とする。かかる構成では、対向板部５２の手前側板部と対向板部５４との間が手前側部分（第１部分に相当）となり、対向板部５２の奥側板部と対向板部５４との間が奥側部分（第２部分に相当）となる。そして、奥側部分の溝幅が手前側部分の溝幅よりも小さくなる。したがって、この場合にも、見切り材４２を厚みの異なる各軒天板３６Ａ，３６Ｂにそれぞれ取り付けることが可能となる。また、上側の対向板部５４には段差板部が設けられていないため、厚みの小さい軒天板３６Ｂを第１溝部４５の奥側部分に挿入する際は、軒天板３６Ｂの外壁側端部３６ａを対向板部５４の下面に沿わせながら挿入することが可能となる。そのため、軒天板３６Ｂを段差板部に引っ掛けることなく、奥側部分まで比較的容易に挿入することが可能となる。

【００５６】

なお、各対向板部５２，５４の両方にそれぞれ段差板部を設けるようにしてもよい。その場合、各対向板部５２，５４の段差板部を外壁１１の厚み方向において同じ位置に設定すればよい。ただし、この場合、厚みの小さい軒天板３６Ｂを奥側部分に挿入する際には、軒天板３６Ｂが各対向板部５２，５４の段差部に引っ掛かって挿入しづらくなるおそれがある。そのため、この点を鑑みると、各対向板部５２，５４のうちいずれか一方にのみ段差板部を設けることが望ましい。

【００５７】

・上記実施形態では、支持金物４１の形状をＬ字状としたが、支持金物４１の形状は必ずしもこれに限らない。例えば、支持金物を、外壁１１の上端部に引っ掛け可能な引掛部と、その引掛部から外壁１１の外面に沿って垂れ下がる垂下部と、その垂下部から軒先側に延びる延出板部とを有する構成とすることが考えられる。その場合にも、その延出板部を、見切り材４２の第２溝部４６に挿入するようにすれば、支持金物に見切り材を取り付けることが可能となる。

【００５８】

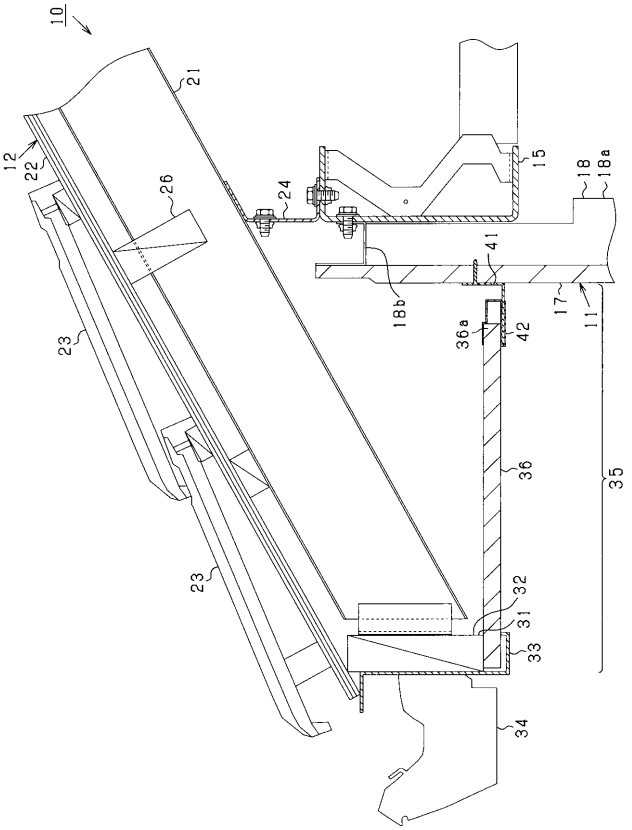
・上記実施形態では、見切り材４２に第２溝部４６を設け、その第２溝部４６に支持金物４１の延出板部４１ｂを挿入させることで見切り材４２を支持金物４１に取り付ける構成としたが、これを変更してもよい。例えば、見切り材４２に、支持金物４１の一部にビス等で固定される固定板部を設け、その固定板部を上記一部に固定することで見切り材４２を支持金物４１に取り付けるようにしてもよい。

【符号の説明】

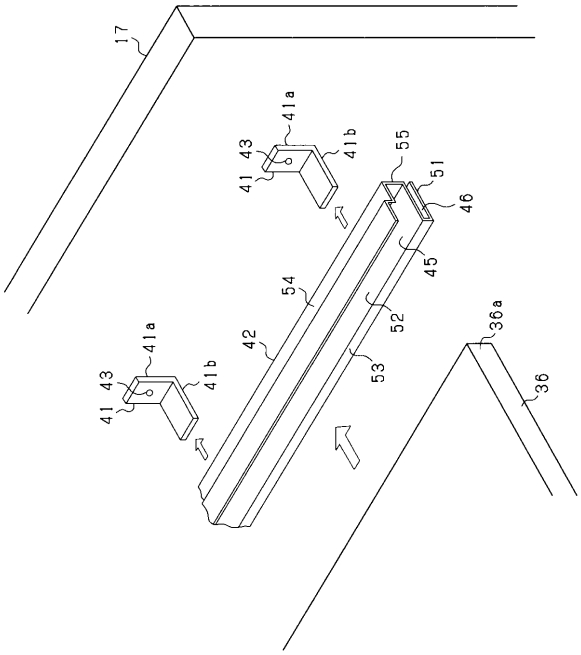
【００５９】

１０…建物、１１…外壁、１２…屋根部、３５…軒部、３６…軒天板、３６ａ…外壁側端部、４１…支持部材としての支持金物、４１ａ…固定板部、４１ｂ…延出板部、４２…見切り材、４５…第１溝部、４６…第２溝部、５２…下側の対向板部としての対向板部、５４…上側の対向板部としての対向板部、５４ｂ…段差部としての段差板部、６１…第１部分としての手前側部分、６２…第２部分としての奥側部分。

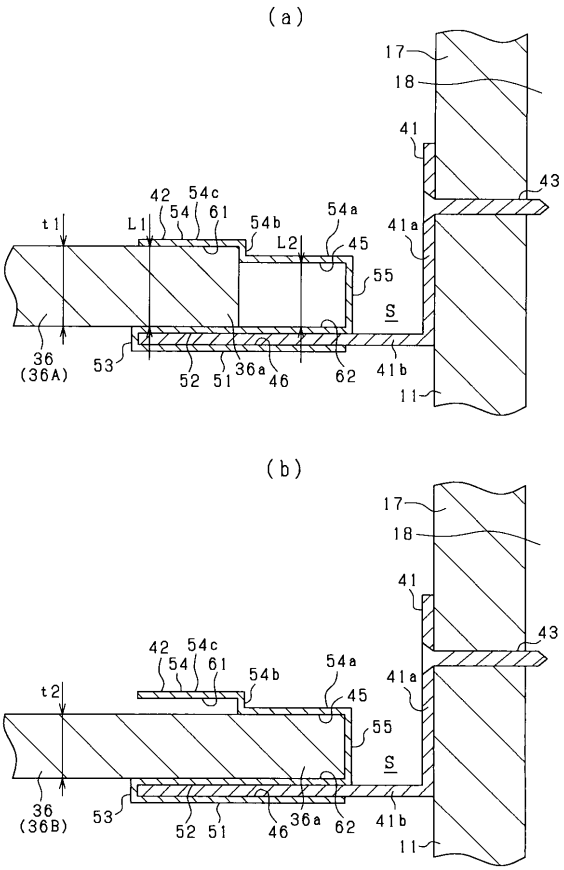
【図１】


10
21
12
22
26
24
15
18
18a
41
18b
17
11
36a
42
23
36
35
23
32
31
33
34

【図２】


17
41a
41 43
41b
55
51
46
54
45
52
42
53
36a
36
41a
41 43
41b

【図３】


(a)
17
18
41
43
42
54c
54
61
54b
54a
t1
L1
L2
45
41a
55
S
36
(36A)
53
52
51
36a
46
62
41b
11
(b)
17
18
41
43
42
54c
54
61
54b
54a
t2
45
41a
55
S
36
(36B)
53
52
51
46
36a
62
41b
11